

三溪園における移設石造物・移築建造物と その意義について

小野 健吉（大阪観光大学）

1. はじめに

近代数寄者らが古代寺院跡等から礎石や石造物を自らの邸宅や別荘の庭園に移設した事例が明治・大正時代に多く見られる。これは、こうした礎石・石造物等を収集してそれを仲間内で互いに見せ合う好事家的な骨とう品趣味と見ることが可能であるとともに、庭園に歴史性を加えるという意図を見て取ることも可能であろう。今もそれらが園内にある庭園としては、たとえば東大寺の塔礎石がある依水園（奈良市）や藤田邸跡庭園・旧太閤園¹⁾（大阪市）、飛鳥時代の石造物「出水酒船石」が園内的一角にたたずむ碧雲莊（京都市）などが知られる。もちろん石塔・石仏・燈籠・手水鉢といった古石造物を他所から庭園に持ち込む事例となれば、近世から現代にいたるまで枚挙にいとまがない。一方、江戸時代以前の古建築を園内に移築した事例も、解体移築が比較的容易な茶室やランドマーク的な役割を担う塔などを中心に見られる。庭景を形成するために移築される塔では、藤田邸跡庭園の多宝塔²⁾、椿山莊（東京都豊島区）の三重塔（圓通閣）³⁾や冬花庵（兵庫県宝塚市）の三重塔⁴⁾などがその事例として知られる。

三溪園（横浜市）では、移設石造物としては伝東大寺礎石や伝光明皇后使用「辰巳の手洗石」といった古代（伝古代）の石造物のほかに中世の層塔や宝篋印塔あるいは近世の見立物手水鉢などがあり、移築建造物としては、旧燈明寺三重塔や臨春閣（旧紀州藩巖手御殿）をはじめ戦後に移築された旧矢塙原

家住宅など10棟が園内の適所に配されている。移築建造物がこれほど多く、しかもそれらが庭景の不可欠な要素として見事に機能している点で、三溪園は他の庭園の追随を許さない。本稿では、三溪園の移設石造物・移築建造物を整理したうえで、庭園におけるそれらの意義についても考えてみたい。

2. 三溪園

原富太郎が横浜市本牧三之谷に造営した三溪園（図1）は、平成19年（2007）2月6日に名勝に指定された。以下に、「国指定文化財データベース」に載せられた詳細解説を転載し、その概要とする。

横浜市東南部に所在する三溪園は、丘陵と谷で形成される変化に富んだ地形を持ち、面積は約18haに及ぶ。三溪園を造営した原富太郎（1868-1939）は近代横浜随一の実業家で、三溪と号し、数寄者としても知られた。三溪園の敷地の一部は、富太郎の妻の祖父で幕末から明治時代にかけての横浜の豪商原善三郎（1827-1899）が明治初頭に入手していたもので、三溪は明治32年（1899）の家督相続後、土地を買足しながら、自らの構想で三溪園の造営を開始。同35年には鶴翔閣を新築し、旧天瑞寺寿塔覆堂や茶室寒月庵等の移築に着手している。同38年には配下の庭師を庭園視察のため関西方面に派遣しており、この時期、造園工事は佳境に入っていたものと見られる。現在の外苑部分が一定の整備を終えたのは同39年のことで、同年5月から三溪の意向により一般に公



図1 三溪園平面図（『三溪園パンフレット』）

開された。この時期、私園である三溪園の公開は画期的な試みとして特筆される。開園後も古建築の移築などの造営は続き、明治40年には、旧東慶寺仏殿を鎌倉から移築するとともに、川崎の小向などからの梅林の移植を終えている。同42年には三溪園に居を移し、大正3年（1914）には旧燈明寺の三重塔を大池西の丘陵上に移築して全園のランドマークとし、外苑を完成させた。同4年には、私的空間としての内苑の造営に着手。池や溪流の整備を進めながら、同5年には天授院、同6年には紀州藩巌出御殿の遺構と伝える臨春閣、同7年

には月華殿と春草廬の移築を行い、同9年には白雲邸を新築するなど、着々と整備を進めた。内苑の造営は大正11年の聴秋閣の移築をもって完了し、翌年にはお披露目の大師会茶会を開催している。内苑の移築建物の配置やそれらの建物とよく調和した周辺の修景もまた三溪の構想によるもので、数寄者としての三溪の美意識が窺える。

三溪園は関東大震災、太平洋戦争という受難の時期を経た後、昭和28年以後、原家から財団法人三溪園保勝会に段階的に寄贈された。外苑では、昭和35年（1960）に旧矢筈原家住宅、同62年に旧

燈明寺本堂が移築され、さらに平成12年（2000）には鶴翔閣が修復された。また、内苑には平成元年に、来訪者への三溪の事績の紹介等を目的とした三溪記念館が建設された。なお、三溪園の諸建物のうち臨春閣など10棟が重要文化財に、鶴翔閣など3棟が横浜市指定有形文化財に指定されている。

三溪園は、外苑と内苑からなる本来の地割と優れた庭園景観を保持している。代表的な庭園景観としては、対岸の丘上に旧燈明寺三重塔を仰ぐ大池、背後に緑の丘陵を負い前面の池水にその姿を映す臨春閣、緑陰濃い溪流と優美な姿の聽秋閣の絶妙の対比などがある。さらに、歩行に伴う庭園景観の変化も高く評価できる。また、海浜の埋立により、かつてあった松風閣跡周辺の高所からの海への眺望は失われたものの、庭園内部から視覚的に周辺の環境の変化をうかがわせるものがほぼ遮断されており、この点も大都市に所在する大庭園としては稀有の特色である。

本庭園は、近世以前の象徴主義から脱却した近代の自然主義に基づく風景式庭園として傑出した規模・構造・意匠を持ち、保存状態も良好で、学術上・芸術上・観賞上の価値は極めて高い。また、当初の原富太郎（三溪）の構想どおり広く公開され、多数の来訪者に活用されている点も高く評価できる。よって、名勝に指定し、保護を図ろうとするものである。

3. 移設石造物と移築建造物

（1）移設石造物

園内には移設されたものを含め多数の石造物がある。報告書⁵⁾に記載の56件のうち移設されたと見られる主要なもの概要を以下に示す。なお、三溪園に移設された時期については、ほぼ不明である。また、それぞれ移設後の場所の移動の可能性もある。

1) 伝東大寺礎石（奈良時代）

自然石上面を削って径93cmの円形の柱座を作り出し、座の中央に出柄を設ける。奈良東大寺の建物礎

石であったと伝える。春草廬前所在。

2) 「辰巳の手洗石」（鎌倉時代）

長さ170cm・幅90cm・高さ45cmの概略直方体の石材に楕円形の穴を穿った石造物で、寺院等で用いられた水槽かと推測される。奈良の法華寺にあったもので、光明皇后使用との伝承があるが、鎌倉時代の制作と推定される。天寿院前所在。

3) 宝篋印塔（鎌倉時代）

典型的な関西形式の宝篋印塔で、総高277cm。塔身には金剛界四仏（阿閦如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来）種子を彫り、蓋が上下二石からなる。天寿院裏山所在。

4) 十三重塔（鎌倉時代）

塔身の通減状態は整うが、軒先の厚みが不揃いであるため、一部に鎌倉時代の材を残して補修・調整されたものと推定される。聽秋閣前所在。

5) 伝奈良秋篠寺燈籠（室町時代）

円形の反花の上に中節のある円柱の竿を立て、八角の中台・大面取り八角の火袋・八角の笠・受花付きの宝珠を重ねる。奈良秋篠寺のものと伝える。旧天瑞寺寿塔覆堂後方所在。

6) 瓢箪手洗鉢（安土桃山時代）

径94cm、高さ31cmの円盤形で、側面に瓢箪唐草を浮き彫りする。豊臣秀吉愛用で、藤堂高虎に譲られて伊賀上野城にあったものと伝える。臨春閣縁先所在。

（2）移築建造物

他所から三溪園に移築した建造物としては、10棟が知られる。以下に来歴等とその概要を示す⁶⁾。

1) 旧燈明寺三重塔（重要文化財／室町時代）

京都府木津川市（旧相楽郡加茂町）の燈明寺にあった三重塔。燈明寺は、天平7年（735）創建と伝える古刹で、三重塔は室町時代の特徴を有し、康生3年（1457）頃に復旧再建されたものと推定される。大正3年（1914）に三溪園に移築された。

2) 旧燈明寺本堂（重要文化財／室町時代）

三重塔と同じく京都府木津川市にあった燈明寺の本堂。様式や手法から室町時代の建築と推定される。

昭和22年（1947）の台風で被害を受け解体保存されていた部材を寄贈され、昭和62年（1987）に三溪園に移築。

3) 旧矢箇原家住宅（重要文化財／江戸時代）

岐阜県高山市（旧大野郡莊川村）にあった宝暦年間（1750頃）の建築と伝える大規模な上層農家建築。ダム建設によって敷地が水没することになったことから、当時の所有者 矢箇原昱氏から寄贈を受け、昭和35年（1960）に移築。

4) 旧東慶寺仏殿（重要文化財／室町時代）

弘安8年（1285）創建の鎌倉の東慶寺の仏殿であった建物。室町時代の仏殿の形式を持ち、永正6年（1509）の東慶寺火災後の再建と推定される。明治40年（1907）に三溪園に移築。

5) 臨春閣（重要文化財／江戸時代）

慶安2年（1649）に紀州藩の別荘 岩出御殿として紀の川畔に造営され、宝暦14年（1764）まで現地で存続。その後、大阪春日出新田の飯野氏別邸に移され、清海氏に所有が移っていた。この建物を、原三溪が明治39年（1906）に譲り受け、大正6年（1917）に三溪園内に移築。建物は3棟からなり、第一屋と第二屋の位置関係は岩出御殿当時のままと見られるが、第三屋はもともと第一屋の背後にあった。

6) 春草廬（重要文化財／江戸時代）

織田有樂斎の作と伝える茶室で、宇治の三室戸寺金蔵院にあって九窓亭と称していた。大正7年（1918）に月華殿とともに移築。なお、「春草廬」は、もともと臨春閣があった大阪の春日出新田の庭内にあった茶室の名で、この茶室は臨春閣とともに三溪園に移築されたが、現在は東京国立博物館に移されている。

7) 月華殿（重要文化財／江戸時代）

徳川家康による伏見城の諸大名伺候の控室であったとされる建物。元和6年（1620）の伏見城取り壊しの際に宇治の茶匠 上林三入に譲られ、上林家から三室戸寺金蔵院に贈られて客殿として用いられていた。大正7年（1918）に、同じく三室戸寺金蔵院にあった九窓亭（現在の春草廬）とともに移築。

8) 聰秋閣（重要文化財／江戸時代）

元和9年（1623）、徳川家光の上洛時に佐久間将監に命じて二条城内に造営させた楼閣建築と伝える。その後、稻葉正成の江戸屋敷に移され、さらに明治14年（1881）に二条邸に移築されていた。大正11年（1922）に原三溪に譲られて三溪園内に移築。

9) 旧天瑞寺寿塔覆堂

（重要文化財／安土桃山時代）

天正20年（1592）に豊臣秀吉が京都の大徳寺内天瑞寺に母の長寿を祝って建てた寿塔の覆屋。天正十九年の墨書銘がある。天瑞寺の廃滅に伴って瑞光院に移され、さらに大徳寺黄梅院に移されたのち、明治35年（1902）に移築された。

10) 天授院（重要文化財／室町時代）

鎌倉の建長寺の近くにあった心平寺の跡に建っていた地蔵堂で、形式手法から室町時代末期のものと推定される。大正5年（1916）に移築され、原家の持仏堂として用いられた。

4. 移設石造物と移築建造物の意義

（1）移設石造物への敬意

三溪園内の石造物の中には近代の制作と見られるものもあるが、奈良時代の伝東大寺礎石（図2）をはじめ、鎌倉～江戸時代の制作になるものも多い。明治以降の近代庭園では、数寄者の手になるものをして多くの庭園で古い石造物を移設することが流行した。それらは、庭園内の適所に据えられて庭景の見どころとなった。三溪園は、その広大な面積に比して、必ずしも石造物が多いわけではないが、石造物をどこに置くかについては、原三溪みずからが熟慮したことは想像に難くない。伝東大寺礎石や「辰巳の手洗石」については、そのままの形状で適所に設置したもので、そこにはこうした古い石造物の歴史性に対する敬意も感じられる。藤田邸跡庭園となっている旧藤田傳三郎邸の庭園では、東大寺の塔礎石の柱座に水穴をあけて手水鉢としており（図3）、古い石造物も珍奇な造園資材の一つとして扱うといった姿勢が垣間見えるのとは対照的であ



図2 伝東大寺礎石（財団法人三溪園保勝会提供）



図3 旧藤田邸跡庭園の東大寺塔礎石

る。三溪園の石造物の中には、中世の五輪塔の水輪や地輪に水穴を穿った手水鉢、京都五条大橋の橋脚石材を用いた手水鉢などもあるが、これらは見立物手水鉢として流通していたものを購入したものであろう。

（2）庭園構成要素としての移築建造物

三溪園の移築建造物で特記すべきは、特色ある地形を持つ場所や巧みに造園・修景された空間に立地し、周囲の景観と極めてよく馴染んでいることである。これは、施主の原三溪が自ら絵筆をとるほどに美術の豊かな素養を備えていたことによる。これらのことについては、以前に「三溪園に見る原富太郎（三溪）の思想・造園理念・意匠」⁷⁾に取りまとめたことがある。繰り返しにはなるが、その概要をあらためて示しておきたい。

まず、地形を最大限に活かして移設建造物の姿を際立たせたのが旧燈明寺三重塔である（図4）。三



図4 大池越しに望む山上の旧燈明寺三重塔

溪園は、明治34年（1901）頃から造営が開始され、翌年には原家の本邸となって庭園の整備も着々と進められる。明治39年に「遊覧御随意」の看板を掲げて市民に公開された後も古建築移築を含む整備は続けられ、大正3年（1914）に園内山上への旧燈明寺三重塔の移築を完了する。「塔のある風景」は原三溪の念願であったと思われ、その位置は熟考に熟考を重ねて決定されたものであろう。それだけに、景観に溶け込んだ姿は抜群で、外苑はもとより内苑からも望めるランドマークとして三溪園の要をなしている。大池が水鏡となって山の上の塔を映し出すことも、計算の内であったに違いない。

一方、移築建造物周辺の造園・修景が際立つ例としては、内苑の臨春閣（図5）と聽秋閣（図6）がある。臨春閣は、内苑の中心部にあり、緑濃い丘陵を背負う場所に造成された平坦地に建ち、前面に池を穿つ。周辺の修景に合わせて3棟の配置を変えて移築された臨春閣は、御殿建築としての使い勝手はもちろんのこと、庭園内の景物として、またその前面の池や遠く外苑の三重塔までも望む視点場として、文字通り内苑の要をなす。臨春閣の西方に位置する聽秋閣の脇には、渓流が心地よい音を響かせながら流れ下る。あたかもこの渓流沿いを選んで建てたかに見える楼閣であるが、渓流もまた人工であり、建物や渓流を構成要素とするこの一帯すべてが、地形を活かしつつ造形された空間なのである。聽秋閣とその前の渓流一帯の空間については、実業家で数



図5 臨春閣



図6 聽秋閣

寄者としても知られた野崎幻庵が大正12年（1923）4月の大師会茶会の新聞記事の中で、「山を下らむとするに當り、水聲や、緩やかなる邊りに停みて其風致を望むに、巨巖溪流を挟み、渥々湧々の響きを傳へて心耳洗はしむるの景、殆ど天然に任せたるの觀あり、寃にや山、水を得ざれば生動せず、石、樹を得ざれば蒼潤ならず、（中略）鈍翁も余も共に造庭の妙を賞するや、三溪梢得意の色を湛へて、數年来慘憺の苦心を語る」⁸⁾と記すように、原三溪にとっても渾身かつ会心の造園・修景であったと言えよう。

三溪園の移築建造物には、戦後の旧燈明寺本堂や旧矢筈原家住宅も含め、本来の所在地では良好な状態での保存が難しかった物件が多い。三溪園への移築はその救済という一面も持っていたわけで、この意義は忘れてはなるまい。もちろん、三溪園が移築建造物を構成要素とする自然主義風景式庭園として見事な空間を達成したことの庭園史上の意義も大きい。これは、好事家の域をはるかに超えた原三溪の感性と造形力によるもので、移築建築物にとっては新たな生命が吹き込まれたとの見方も可能であろう。

5. おわりに

三溪園は、他所から移設された石造物が適所に配され、多くの移築建造物が庭景を形成するという他に類例のない庭園である。こうした在り方は、近代

の富裕な数寄者らによる庭園造りの流れの中に位置付けうるが、傑出した出来栄えを誇るのは、原三溪の財力、芸術的造形力、自然や古文化に対する敬意のなせるところであろう。さればこそ、太平洋戦争での被災からも多くの人の力で復興され、現在も横浜市民をはじめ多くの来訪者に愛でられ続けているのである。公益財団法人三溪園保勝会の運営により、国指定名勝として、確実な保存はもちろん、多様な活用が今後も継続されることを願う次第である。

註

- 1) 関西財界の雄 藤田傳三郎が明治後半から造営を開始し、大正5年（1916）に完成した藤田邸、通称「網島御殿」の本邸と東邸にあたる。
- 2) 藤田平太郎所有時の大正5年（1916）に、高野山光台院から移築。
- 3) 藤田平太郎所有時の大正14年（1925）に、広島県賀茂郡の篁山竹林寺から移築。室町時代末期。
- 4) 冬花庵は日本画家・橋本関雪の別邸。三重塔は三重県伊賀市の淨瑠璃寺にあったもの。
- 5) 横浜市文化財現況調査団編『横浜の文化財—横浜市文化財綜合調査概報（五）一』横浜市教育委員会社会教育部文化財保護課1984
- 6) 財団法人三溪園保勝会編『三溪園』財団法人三溪園保勝会1989
- 7) 小野健吉「三溪園に見る原富太郎（三溪）の思想・造園理念・意匠」『造園雑誌』53巻5号1990
- 8) 野崎幻庵「於横浜郊外三溪園」新聞記事（中外商業新報）1923年4月24日